

と学会連絡誌

創刊号



と学会連絡誌創刊号 目次

「と」とは何か ーと学会設立にあたってー	3
発表！ 第一回日本トンデモ本大賞！	4
今月のトンデモ本はこれだ！ 『古代アメリカは日本だった！』	6
流行社会が十三時間でわからない本	7
門田泰明『魔空戦弾2』のこと	12
サイコップ(CSICOP)とは何か	14
菜食主義者の絶対平和	17
トンデモ本発見の難しさ	20
<会員著作紹介のページ>	21
ドクター中松の正体 ーフロッピーディスクの発明者は 本当にドクター中松なのか？ー	23

と学会の活動案内（予定は予定、決定に非ず）

例会は年4回、2月、5月、8月、11月の第二日曜日の予定
次回は1993年2月14日に、喫茶ルノアール新御茶の水店の予定
(JR御茶の水下車ニコライ堂下)

他に関西例会開催検討中、入会者は随時受付

連絡誌は原則 年4回(コピー誌) 臨時増刊有り
他に年1回論文誌(夏発行オフセット予定) 有料 いずれも、外販有り

パソコン通信(Nifty)上にホームパーティを設置
参加希望者はGGA00541 福島まで電子メールで問い合わせください。
現在、約200の発言

93年夏、SF大会に参加予定(オカルト超科学トンデモ講座主催)

「と」とは何か -と学会設立にあたって-

「と」とは何か。それは語源的には「とんでもない」の短縮形である。では、なぜ「とんでもない」を研究するのか。

それに答えるためにはまずトンデモ本について説明しなければならない。

トンデモ本とは、

- ①内容が常識から掛け離れていて、読者の意表を突き、笑えるもの。
 - ②その著者は、ギャグを意図していないがギャグになっているもの。すくなくとも真面目にとる読者が少なからずいること。
- という本である。例をあげよう。

『黒豹スペース・コンバット』というアクション小説がある。日本屈指のベストセラーと言っているほど売れている作品だ。しかし、常識ある人間が読めば笑うしかないほど凄まじい作品である。特命武装検事（まあ和製007と思って間違いない）黒木豹介が悪の秘密組織「赤いクリスマス」と戦うという筋だが、内容は拳銃でミサイルやUFO(!)を撃墜するとか、月のそばで真っ赤に燃える流星とすれちがうとか、月に行くと思ったら知的生命体がいるとか、戦前の小説でもやらないようなことを平気でする。

凄まじいのは、作中でソ連の原発でチャイナシンドロームが起きるのだが、この原発が地球の中に沈み、ソ連の裏側の国が危ないということ。チャイナシンドロームを文字通りに解釈し小説にしてしまった人はたぶん他に例がないと思う。

こうした本がベストセラーなのである。

もう一つ例をあげよう。

川尻徹の『ノストラダムス戦争黙示』などのシリーズは、ノストラダムス本として五島勉に匹敵する人気を誇り、毎作数十万部売れるらしい。しかし、この人の解釈法はメチャクチャ。メチャクチャすぎて大笑いできる。

まずノストラダムスの原詩（フランス語である。）をローマ字読みして日本語で解釈する。文字（単語ではない）を適当に抜き出して言葉を作るなど。ひどい例ではポツダム宣言の日付と終戦の日付をトランプのポーカーの役で解釈する。

そうして出す結論は、ノストラダムスはハナモク現象を予言していたとか、宮崎事件を予言していたとかいうもの。さらに凄まじきものは、安藤広重の東海道五十三次の浮世絵にはノストラダムスの予言が隠されているというものである。これを真面目に論じられると、あまりの非常識に、もう魂を揺さぶる感動を覚える。あまりの衝撃に、私は川尻徹の全著作を買ってしまっているほどである。

他にも、多くのトンデモ本がある。（それについては『日本SFごでん誤伝』を参照）しかし、こうした非常識の感動を与えてくれるものは、なにも本に限らない。トンデモナイ映画、トンデモナイ学会発表、トンデモナイ商品・・・トンデモナイ宗教・・・

そのなかには商品として大ヒットしたものもあり、また社会現象になるほど信者を増やした宗教もある。けして、本に限った話ではないのだ。その意味を込めて、この世界に共通する、なんらかのトンデモなさを「と」と呼び研究することとした。

研究してどうなるのか？この疑問に対しては、今のところ、すくなくとも笑える・・・というのが答えである。ほかにも何かありそうな気がしているが、すくなくとも当座はそれで充分ではないか。

さて、と学会を始める前に、すでに多くの関連分野が明らかになっている。その分野とは超科学・オカルト・陰謀論・新興宗教・SF・奇書収集などであり、幸いにもそのような分野の研究者の支援と入会を多数得ることができた。

今後の「と学会」に期待して欲しい。

（と学会事務局 藤倉珊）

発表！ 第1回日本トンデモ本大賞！

遅ればせながら、第1回「日本トンデモ本大賞」の結果発表を行ないます。

これは1992年8月22日に日本SF大会HAMACONで行なわれた「オカルト超科学トンデモ講座」の中の1コーナーで、1991年に日本国内で出版された本の中から、最もトンデモないものを選ぶという企画です。全部で一〇作品をノミネートし、その中から観客の方々に投票していただく方式です。

ノミネート作品は次の通り。

- ①あすかあきお
『まんが・古代文明消滅の謎』（小学館）
- ②イブキ友也
『100億年後の地球』（星雲社）
- ③榎本天法
『超ノストラダムス・平成大予言』（ハート出版）
- ④門田泰明
『黒豹ダブルダウン』1～7（祥伝社）
- ⑤川尻徹
『ノストラダムス戦争黙示』『ノストラダムス複合解釈』（徳間書店）
- ⑥霧島高雄
『宇宙人恐怖の思考回路』（ハート出版）
- ⑦コンノケンイチ
『ホーキング宇宙論の大ウソ』（徳間書店）
- ⑧深野一幸
『宇宙エネルギーの超革命』（廣済堂出版）
- ⑨山田久延彦
『宇宙の始めにビッグバンは無かった』（扶桑社）
- ⑩ライアル・ワトスン
『シークレット・ライフ』（筑摩書房）

投票結果は次の通り。

『古代文明消滅の謎』	16
『100億年後の地球』	2
『超ノストラダムス・平成大予言』	11
『黒豹ダブルダウン』	24
『ノストラダムス戦争黙示』他	37
『宇宙人恐怖の思考回路』	18
『ホーキング宇宙論の大ウソ』	21
『宇宙エネルギーの超革命』	4
『宇宙の始めにビッグバンは無かった』	4
『シークレット・ライフ』	2
その他	1

著者名アイウエオ順に並べたのですが、中盤に強烈なインパクトのある作品が続いたせいか、最後の三作品は印象が薄くなってしまったようです。

また、コンノケンイチや門田泰明というビッグネームにはさまれて、無名の霧島高雄氏が健闘しているのが注目されます。やはりオリジナリティの高さが評価されたのでしょうか。

「その他」の一票は、大橋裕朋『プロジェクト・セザール』（技術出版）です。マイナーなんでノミネートからはずしたんだけど、やっぱり読んでる人がいるのか……。

投票用紙に書かれていた感想をいくつか紹介しておきます。

『古代文明消滅の謎』

*「日本列島大回転は、『未知との遭遇』のマザーシップ以上の感動を与えてくれた」
『黒豹ダブルダウン』

*「次々エスカレートする著者近影の中身はこんなだったんですね」

*「どれも捨て難いけど、自信マンマンで編集者に横暴の限りをつくしているという門田先生に「日本トンデモ大賞」が届くとどーゆー反応を示すか楽しみにになります」

『宇宙人恐怖の思考回路』

*「現在の雪どけの中では時代に逆行していると言えない」

*「作者の思考回路の方がよっぽど恐怖じゃわい！」

うーむ、次回からは投票用紙に感想を書く欄も入れなくちゃね。

というわけで、受賞作は川尻徹先生の『ノストラダムス戦争黙示』『ノストラダムス複合解釈』と決定しました。川尻先生には後日、二見書房気付で、賞状とささやかな賞品（ライター）をお贈りしました。（徳間書店気付にしなかったのは、『戦争黙示』を読む限り、二見書房気付の手紙はちゃんと川尻先生に届いていることが証明されたからです）

ところで、郵送してから友人に指摘されたんですが、「弘」っていう字は「56」に似てないこともないですよ。ね。「山本56」うーん……。

川尻先生の次の著書で、賞状とライターがどのような解釈をされるのか、期待大です。（なお、封筒や手紙や切手には、誤解を招くような小細工はいっさいしなかったことを断言しておきます）

（編集部付記）

1992年12月25日現在、川尻徹氏がなにか反応した形跡はありません。川尻徹の新作『暴かれた黙示 芭蕉—隠れキリシタンの暗号 『奥の細道』は予言アナグラムになっていた！』にも、なにもありません。

なおトンデモ本大賞よりだいぶ前に二見書房の人が『ごでん誤伝』を川尻先生にみせるということで買ったことがあります。その後は不明です。

察するに、トンデモ本作者は、自分の気に入った資料以外は無視するという精神に徹しているでしょう。

今月のトンデモ本はこれだ！

ドン・R・スミサナ

『古代、アメリカは日本だった！』

吉田信啓・訳／徳間書店

ものすごいタイトルだが、内容は想像以上にすごい。日本人の先祖はアメリカから渡ってきたインディアンであり、その証拠に、インディアン語に由来するアメリカの地名や人名は、すべて日本語で読めると主張しているのだ。

いくつか例を挙げると――

テキサス＝敵刺す

ミシシッピー＝水疾飛

ワイオミング＝上の民家

オハイオ＝おはよう

カンザス＝関西

カナダ＝金田

ナイアガラ＝荷揚げ場

アパッチ＝あっぱれな人

ジェロニモ＝地浪人者

ギャグとしか思えないが、著者は大真面目である。清水義範の短編「序文」に出てきた「英語起源日本語説」を思わせる。

訳者の吉田氏は、『超古代、日本語が地球共通語だった！』（徳間書店）という本を出しており、自説を立証すべく、広範囲な活動を行なっているらしい。『ニュースステーション』で取り上げられたこともあるほどだ。

訳者まえがきでは、日米貿易摩擦について触れ、「もともとアメリカは日本のものだったのだから、日本がそれを取り返しても当然ではないか」と、すごいことを言っている。今後、どのような展開があるのか楽しみである。

（山本弘）

（蛇足）

著者の吉田氏がおこなっている古代文字（ペトログラフ）の研究と称するものはニュースステーションで二回も取り上げられているが、どうもあやしいものである。

吉田氏のいう古代シュメールの稚拙文字とは、単に線が二本交差しているとか、点々がならんでいるとかのレベルの文字であり、仮に日本の石器時代の原始人が書いたとしても偶然の一致で片づけられるレベルのものとは思えない。

さて吉田氏はICOMOS(ユネスコ記念物・遺跡に関する国際委員会)CAR(岩石芸術に関する国際委員会)の日本代表組織委員長というが、この肩書の実体はなんなのだろうか。

なお日本語と英語の共通点を見つけたと称する説は、すくなくとも明治の木村鷹太郎まで遡り、『ごでん誤伝』で少し紹介した。

（編集部 藤倉）

流行社会が十三時間で分からない本

山本弘

「山本さん、これってひょっとしてトンデモ本じゃないでしょうか？」

知り合いの女の子がそう言って、ピンク色の装丁の一冊の本を差し出した。彼女の話には、「ちょっと見ると古本屋さんみたいに見えるちっちゃな本屋さん」で発見したそうだ。

窓里弓男『流行社会—スペイン十三時間』（主婦の友出版サービスセンター）。発行は一九八九年である。奥付を見ると、作者と発行者は同一なので、窓里氏が自分で書いて自分で編集した本ではないかと推測される。B6版三六四ページで五百円と、やけに安い。

表紙には「ジャルデーノ・デ・モード誌が著者の「高級服と詩人の魂」で未来モードの行くえを予告した」などと書いてある。出版社名とタイトル、それにこのコピーを見れば、誰でもこれがファッションについての本だと思うだろう。

しかし、ちょっと待った。帯にはこんなフレーズが書いてあるのだ。

流行社会〈代表は冥王宮〉

16世紀に最大帝国スペインのファナ女王は、自分で作った
ウル（原始）国際語の密談で、51年間女王の位を守った。

流行社会は スタイル・サロン
どん底は スター・チェンバー

冥王宮？ ウル国際語？ スター・チェンバー？

こりゃ何だ？ と思って本を裏返すと、さらに不可解なことが書いてある。

冥王宮バラノジュモン2世の冥児が愛したベスと、三代の女性—祖母は断頭台上に消え、母はウル国際語を改造、娘はベスの夫セヒスムンドの黒い花園を見た。
ベスは現代のファナ女王

ますます分からなくなってカバーの見返しを見ると……

スタイル・サロンとは何か 十三時間でわかる

スペインのハイ・レイディ（流行社会人）クララ・ビザンティンが冥王の国からでも恋人ロイスに話をしたくて、毎日かならず朗読を練習していた原始国際語の基本文集。この言葉で天国と話のできた薔薇狂いの女王が、その秘密語を作った城「流行社会」。

それでは、と思って著者紹介を読むと——

著者紹介 Yumio Madry

1915年、東京生まれ。三笠書房文庫に「香炉」、「水族館」、婦人新聞に「女性旗手」

を連載、装苑（So-en）に「高級服と詩人の魂」。

著書：「バレンシアガ」、「大服飾家」

話題になった言葉：ジャルデーノ〈庭〉、ローズ・マッドネス〈薔薇に酔う〉、
ジョ・ラ・レイナ〈女王である私〉

これでは何も分からないも同然である。（「話題になった言葉」って、いったい何だよ？）

逆に、これで俄然、興味が湧いてきた。普通の本なら、表紙を見るなり、中をばらばら

めくるなりすれば、何の本か見当がつく。だが、ここまで正体の分からない本は珍しい。これがいったい何の本なのか、どうしても知りたくなったのである。
 ともかく手がかりはないかと、まえがきを読んでみた。これがまた奇怪な代物だ。

一九二三年の春ごろ、アメリカ冒険映画「ハリケン・ハッチ」のファン宵宮紫門の前に、スペインの踊り子がひとり、あらわれた。

紫門の伯父は貿易商で、ギターを買い付けに行って帰国すると、その娘踊り子がカステネットを持って、東京まで追いかけてきた。

彼女は、まだ小さい少年の紫門に言った。

「一日もはやく、おじいちゃんや、おばあちゃんのいる村へ行きなさい」

彼女は、すみだ川と小名木川の合流地点にかかる万年橋の北、芭蕉庵に近い正木神社で洋神楽を歌いながら踊ってみせてくれた。

ほんの数行の間に、謎が続出する。宵宮紫門とは何者か？ 彼が「ハリケン・ハッチ」のファンであることに何か意味があるのか？ スペインから来た踊り子がなぜ神社で洋神楽を踊ったのか？（彼女が「おじいちゃんや、おばあちゃんのいる村へ行きなさい」と言ったのは、関東大震災を予知したということらしい）

しかし作者は、僕の疑問に答えてくれない。というのも、本編には宵宮紫門なる人物はまったく登場しないからである。エスペラント語の研究者らしいが、実在の人物なのだろうか？

ともかくにも、本編を読み進むうちに、これがどうやら小説らしいということが、おぼろげながら分かってきた。（最初の数十ページは、小説なのかノンフィクションなのかも分からなかった）

時代は二〇世紀初頭から現代にかけて。主な舞台はスペインである。

<p>シャルテック・ア・モード誌が 著者の「高級服と詩人の魂」で 未来モードの行くえを予告した</p> <h2 style="text-align: center;">流行社会</h2> <p style="text-align: center;">〈15世紀から21世紀まで〉</p> <p style="text-align: center;">慈里為勇</p>	<h2 style="text-align: center;">流行社会</h2> <p style="text-align: center;">スペイン土三時間</p>	
<p>流行社会 <代表は冥王宮> 16世紀に最大帝国スペインのフアナ女王は、自分で作った ウル（原始）国際語の密談で、51年間女王の位を守った。 流行社会は スタイル・サロン どん底は スター・チェンバー</p>	<p>セリアアの占い師</p>	<p>冥王宮バラノジュモン2世の冥児が愛したベスと、三代の女性一祖母は断頭台上に消え、母はウル国際語を改造、娘はベスの夫セヒスムンドの黒い花園を見た。 ベスは 現代のフアナ女王</p>

第一章に登場するのは、天才的婦人服デザイナー、クリストバル・バラノジュモン、通称「ガガ」で、彼にまつわる様々なエピソードが、スペイン戦争や第二次大戦などの歴史的な事件とからめて、たいした脈絡もなく紹介される。(あとがきによると、バラノジュモンは作者の創作した人物で「薔薇の呪文」というシャレらしい)

では彼が主人公かということではなく、第三章からはバラノジュモンの後継者であるロイス・アラルコンが登場し、彼を中心とした話になってしまう(作者はバラノジュモンを「冥王」、アラルコンを「冥児」と呼んでいる)。しかも数ページごとに新しいキャラクターが芋づる式に登場し、その大半が背景説明も何もないので、正体不明なのである。

まるでシノプシスを読んでいるようで、展開がやたらに速く、感情移入している余裕などない。

時間の流れも自由自在で、本の中間あたりでバラノジュモンは死ぬのだが、そこから急に、彼の少年時代や、彼の両親が結ばれる経緯についての話になったりする。事件の前後関係や因果関係がさっぱりつかめないのだ。

おまけに文章がすごい。下手なのか上手なのか、さっぱり分からない。どこからこういう形容が出てくるのだろうと、首をひねってしまう。

帯にある「ファナ女王」だが、彼女はストーリーにはまったく関係しない。作者がファナ女王のエピソードを紹介するのは、ようやく最終章になってからある。

百科事典を引いてみると、ファナ女王(一四七九—一五五五)は実在の人物であると分かった。コロンブスに援助したことで有名なイサベル女王の娘で、一五〇四年にカスティリヤとアラゴンの王位を継承した。夫の浮気が原因で精神に異常をきたし、一五〇九年以降は城に閉じこもっていたが、死ぬまで王位継承権は保ち続けたという。

しかし窓里氏によれば、ファナ女王は狂人ではなかったという。その根拠は、顔形や肌の色などから異常者を見分けられると主張した心理学者チェザレ・ロンブローゾの理論である。ファナの顔つきや肌色を分析し、「分類上ファナ型の異常者はきわめて珍しい」と言うのだ。(ロンブローゾの説は現在では完全に否定されているのだが、窓里氏はご存じないようだ)

作者によれば、ファナを幽閉したのは「国際スター・チェンバー」の陰謀で、彼女は狂気を装って、自分で発明したウル・エスペラント語(原始国際語)を使って忠実な側近と会話していたという。このへんの根拠は、僕にはさっぱり分からない。もしかしたら作者はエスペラント主義者なのかもしれないが、それにしてはエスペラント語はこの小説の中では何の役割も果たしていない。

スター・チェンバー(星室裁判所。窓里氏は一貫して「不法裁判所」と呼んでいる)というのは、一六世紀から一七世紀にかけてイギリスに実在した機構で、王宮の「星の間」で開かれたためにこの名がある。通常の裁判所では裁ききれない事例を処理するための超法規的な裁判所なのだが、末期になると墮落して、反政府運動弾圧のために使われたりしたので、清教徒革命とともに消滅した。(こういうことを作者はちっとも説明してくれないので、これまたわざわざ百科事典で調べなくてはならなかった)

当時、スペインにもスター・チェンバーが(それも国際スター・チェンバーが)あったのか、僕は知らない。どこまでが歴史的事実で、どこからが創作なのか、境界線がさっぱり分からないのである。ともかく、この小説『流行社会』の中では、どういうわけか現在でも国際スター・チェンバーが暗躍していて、バラノジュモンに代表される「流行社会」と敵対しており(理由は不明)、じゃまな人間をホテルに幽閉したりしているのである。

アラルコンの愛人のベスペラ・シャレンも国際スター・チェンバーに幽閉されるが、アラルコンは「流行社会を再建するほうが、ベスを救うより、ぼくにとって重要課題なのです」とか言って、助けようとせず、別のアヤラン夫人という女性(およびその母親のクララ)といい仲になる。結局、そのまま数十年が過ぎ、話の終わりになっても、ベスペラは行方不明のままである。(だから「ベスは現代のファナ女王」なのだ)

あとがきを読むと、さらに混乱する。

なぜアヤラン夫人は全女王と呼ばれて、スター・チェンバーにまで人気があったのか。

ロイス・アラルコン冥児によれば、コンピューター言語エイダ〈世界初のプログラマー・バイロンの娘の名前〉のように「アヤラン夫人が組み立てているファナ女王のウル・エス語（原始エスペラント）を、スター・チェンバーが、暗号に使うとした」からである。

（中略）

国際語の試みが表面に出たのは一七世紀で、一六世紀のファナ女王は狂人扱いされていた。これは、一六三三年にガリレオ・ガリレイの地動説がローマのスター・チェンバーで有罪になったのと、似たようなものである。

ジョルジュ・ミシュルの「モンパルノ」はモディリアーニをモデルとする美術小説で、人々のプライバシーや組み立ての変化を考えて、モドリユロという仮の名前になっている。モンパルノ完成は一九二三年一月八日。

一九二三年以来セビリャの占い師洋神楽のみこが数回も東京へ来たのは、高級船員の妻という名目のおかげであった。画家のユトリロは子供のころ父親がいなかったので、スペイン人ウトリリョが、彼の母と結婚もしないのに、名前を貸してくれたのと似ている。

「冥王宮」四つの顔

虹孔雀の間（全女王の紋章トパーズ・パパンがある）

裁きの間（スター・チェンバー）

村長の間（スタイル・セクションは報道部をふくむ）

サイキの間（冥王宮の代表）

少女趣味だけではなく、豊かなハイ・レイディの奥行きと、両方かねそなえるのが婦人服の異質美（質のちがう美しさ）詩人の魂である。

〈薔薇の仮説〉は、冥王宮と不法裁判
美と醜 ギターとコンピューター
婦人服と車 聖女と娼婦
器楽と声楽 天才と悪魔
高山植物と海草 復活と俗物
流行社会とどん底 女王と狂女

この両極を暗示している。

ヴィナスの美術で、海を貝がらで表すのは、ルネサンス前の暗黒時代の悪い癖である。海は髪の毛に印刷された蝶の白粉で示す。

なぜガリレオやモディリアーニやユトリロが唐突に出てくるのか、さっぱり分からない。本編中には、彼らはまったく登場しないのである。

さらに奇怪なあとがきは続く。

アヤラン夫人の母クララ・ビザンティンは、ファナ女王が狂人のように独り言していた原始国際語の言い伝えを守っているのだから、その極秘の言葉を明らかにするよう、特別送達でスター・チェンバーから強迫されていた。

クララは紅い砂時計がこわされるようにスター・チェンバーに首を切られた。アヤラン城にはゴヤ時代（一八〇〇年ごろ）の断頭台があった。なぜシェイクスピアやトマス・キッドの劇で幽霊や物狂いや化け物が重要か、クララは城まで考えにきていた。

この断頭台は、フランス革命映画の製作に使われる予定であった。

アヤラン城の主な収入は、映画撮影場のリースからきている。

エス語百年祭の一九八七年に、クララが城の断頭台で発見されたあと、細い首が落ちてから一五分間も、彼女の口は、フル・フルー（衣ずれ）か雨だれのように、冥児の名を、「ロイス、ロイス」と呼びつづけていた。

フアナ女王の原始国際語など、ありえない——と生きてきた人たちまで、この死者の顔だけが話す声を聞いて、ウル・エスペラント語の存在を信じないでは、いらなかった。

無名のスペイン人からイタリア流行社会のトップに踊り出て没落した、世界で最も話題の多い一族のフランシスコ・デ・ボルジアが、フアナ女王の死の床をみとったのは、ウル・エス語の価値を確かめるためだったとわかった。

アヤラン城の奥から知らせを聞いて現場へきたアヤラン夫人に、冥児は、たずねた。

「七三歳以上が多すぎて、一日平均二〇人が断頭台にかけられる時代、二一世紀の断面図を思わせる七〇数歳のクララ・ビザンティンは、フル・フルー以外に何を言っているのです？」

アヤラン夫人は、まつ毛を伏せて、母クララのウル・エス語を必死に解読した。

「数十年前からあなたを見てきた母の願い

流行社会人の 原始国際語は

霧におおわれ た火山の言葉……

この母の祈りが、その秘密語を大好きなローズと、嫌いなセヒスムンドの仲を裂く、唯一すじの赤い溶岩になるでしょう。それでもローズがセヒスムンドをさがす時、ローズを救えるのは、あなたひとりです」

フアナ女王の重要語の一つはセヒスムンドだった。

冥児は黙って聞いていたかったけれども、深い霧のすき間が、うすくなって、火山の炎が少し見えるように、倒れかかってきたアイリス色アヤラン夫人の体温を感じて言った。

「二一世紀の特色の一つは、七〇何歳の婦人がウル世界語で血まみれの恋をすることです」

もう、何がなんだか分からない。

しかし、この本を「トンデモ本」と呼ぶことに、僕はためらいを覚える。もしかしたら、これは僕には理解できないだけで、ちゃんとした知識を持った文学者が読めば、すごい傑作だという評価を下すのではないか、という思いが去来するからだ。

また、この本には作者自身にしか分からない意味が、暗号のようにちりばめられているらしい（たとえば、一九一五年生まれの作者が、この小説を書いた時に「七三歳」であったことなど）。時間をかければすべて解読できるのかもしれないが、僕にはとてもその気力はない。

しかし、この『流行社会』は決してつまらない本ではない。全体に漂う奇妙なムード、不思議なリズム感は、普通の小説からは決して味わえない、形容不可能な魅力がある。

もしかしたらこれは、トンデモ本ではなく、「奇書」として分類すべき本なのかもしれない。

何にしても、僕にはついにこの『流行社会』の内容を理解することはできなかった。

『黒豹スペース・コンバット』はすごい。黒豹シリーズのなかでも、もっとも途方もない描写で大笑いさせてくれる。

これに比べれば、作者がタイムパラドックスを全く理解していないでタキオン兵器を描く『黒豹ダブルダウン』も、地下核爆発で地殻変動を起こして東北地方をソ連まで移動させようとする『黒豹伝説』も、気象兵器というものが猛毒の雨を降らせるものと作者が思い込んでいる『黒豹列島』も、強力無比な心霊兵器をもつ軍団数百人が後半なぜか機関銃だけの黒豹にあっさり負けてしまう『黒豹叛撃』もかなわない。

しかし門田泰明が描くスーパーヒーローは黒豹だけではない。ひどさで黒豹をしのぐかもしれないヒーローがちゃんといた！ここで黒豹より強い(!)雑賀呑龍が、海底人の陰謀を打ち砕くという『魔空戦弾2』のストーリーを紹介しよう。

『魔空戦弾2』は徳間文庫から出ている。なお前作『魔空戦弾』は、大コンツェルンの跡取りではあったが病弱だった主人公雑賀呑龍が、正体不明の謎の老人から超パワーを授かり、血も涙もない(本当に血が無い)サイボーグと戦う話らしいが読んでいない。読んでいなくとも2を読むのに差し支えは全然無い。

さて、発端は帆船で日本海溝の真上でくつろいでいた呑龍が「謎の巨獣」を目撃するところから始まる。巨獣といっても、人間の形をしており全身は剛毛で覆われ、身の丈は4~5メートル。獣人といった方がいい。それが海の上に吹き出した水柱の中でゆっくり鮫を喰っていると言うのだからわけがわからない。

で、この巨獣に呑龍が襲われたり、ダイヤモンドを満載した船が沈められたり、いろいろあるのだが、雑賀呑龍がどうするかというと、日本海溝に泳いで潜っていくのである。まあ、前作でスーパーパワーを獲得しているとはいえ、海底四千三百メートルまで素潜りでいく男には驚く。黒豹よりも強いことは間違いなさそうである。

さて、潜っていくと日本海溝の中に海底都市が見つかる。海底都市といっても巨大なガラスのドームに覆われた陸地のようなもので、中には千メートルを越す山もあり、川もあり、地形は北海道の南部に酷似しているというトンデモないものである。

で、海底都市(海底大陸と言った方があたっているような気がするが)に入ると、山々の中に、体長三メートルにも及ぶ巨大なヒグマが棲むという注意の立看板が立っている。この後の展開は、予想がつくだろうが、体長三メートルにも及ぶ巨大なヒグマに襲われるのである。(むろんヒグマに負ける呑龍ではない。)

山本弘さんが『超絶図書館』で見抜いたように、この作者は秘境で猛獣に襲われるというパターンが好きらしい。しかし、海底でヒグマが襲ってくる小説などちょっと常人には考えつかない。

で、子細は省くが、そこは海底の北海道だったのである。そして呑龍は、脈絡もなく現れた鹿の背に乗って北海道に伝わる伝説の超異次元の村へいく。そんな伝説があるのかどうかは知らないが海底の北海道に地上と同じ伝説があるというのも変な気がする。とにかく呑龍は、伝説の村へ行き、その村の長老から、超パワーを授かるのである。超パワーを授かる理由も、この村の正体も不明なうえ、別れるとき、この村の事をしゃべってはいけない、しゃべれば即座に死ぬ、約束を守れば神の力が授かるなどと言われる。

あまりにも阿呆すぎる展開に啞然とするが、まだまだ凄い展開が待っている。

謎の村から鹿の背に乗って、やって来たのは海底の東京であった。で呑龍は海底の東京で手をあげてタクシーをとめた。

「麻布へやってください」

で、海底に本当に麻布があり、雑賀家があるのだからすごい。しかも家に戻ると(?)そこに地上の世界では死んでいる両親まで生きていた。海底の世界では呑龍は北海道で遭難したことになっていたのだ。

ことわっておくが、これは平行宇宙ものではない。どういうわけか、この小説は海底人の話と、その海底にある超異次元の世界の話が二重になっている。地上と同じ世界がある

のは海底人の都市のほうで、超異次元の世界は、不思議な村と、その村を襲う魔獣の話である。なお、この魔獣は海上で出会った巨獣とは別のものである。

東京（ただし海底）にもどった呑龍は、そこで超異次元現象に遭遇する。この作者の描く超異次元現象とは、近所に魔獣があらわれ女が喰われてしまうとか、近所の人がいきなり交合を始めるといった幻影が現れることである。

これが（海底の）北海道の謎の村に関係があると睨んだ呑龍は、羽田から11時50分発の東洋国内航空 113便で帯広へ向かう。海底国にも航空便があるのである。

さて超能力（子細は省く）を発揮して不思議な村にもどった呑龍は、村が魔獣に破壊されたあとを発見する。生き残っていた長老から、今度は不老不死の酒というものをもらって呑龍はさらにパワーアップする。長老がいうには、この世界（不思議な村）は死の世界であり、魔獣は現実の世界（海底国）を侵そうとしているのだ。ちなみに死の世界の住人は、魔獣に襲われて死ぬと、その外側にある無の世界に行くそうである。

もちろん超パワーを授かった呑龍は、魔獣と戦って勝ってしまい、捕らえられていた多数の現実の（海底の）世界の住人を救うのである。

で、これで海底の世界が救われたわけではない。

実は、海底人たちは地上侵略を企んでいたのである。なぜか魔獣に拉致された人々のなかに（海底の）防衛庁海洋戦略研究所の副所長と国立科学技術大学の助教授がいたのである。呑龍が地上人と知るとみせた彼らの不審な態度（それどころではないのだが）から、疑問をもった呑龍は（海底の）海洋戦略研究所を探る。実は海底都市は地中から始まったセリウスガスによって滅亡の危機に瀕していたのだ。海底国の政府は、その危機を知り、密かに地上侵略（といっても日本だけ）を画策していたのだ。

ここで、説明しておくが、海底人たちは自分たちが海底六千メートルにすむ海底人であることを自覚しているのである。そしてなぜ海底国は日本とそっくりなのか。それについては次のように言っている。

「我々は想像を絶する水圧と何千年、何万年もの間闘ってきました。そして我々の先祖は多くの犠牲を払って今日の海底都市を築きあげたのです。むろんモデルは日本です。」

なぜ日本をモデルにしたのか、変な話である。それだけではない。海底人と地上人の違いは、海底人には指紋や手のしわがないことだということである。

さて海底国の秘密基地を探った呑龍は、そこで海底国が超異次元の魔獣を手にいれ、改造人間の強化のために使われているのを発見する。日本海溝の海上でみた巨獣は、海底国が地上侵略のために人間に魔獣の力をプラスしてつくった改造人間だったのである。

怒りをみせた呑龍は、海底国で大暴れ。海底国を覆っているドームの維持装置を破壊してしまう。そのあたりを引用すると

この海底国に、亡き両親とそっくりな人間がいることで気持ちの揺らぎはある。だがいくらそっくりであっても海底人であることに変わりはない。

「悪く思うな」呑龍はそう言うなり、ミサイル機銃の引き金を引いた。

これで海底国を全滅させてしまうのである。海底国でも凶悪であるのは、政府の一部だけで、多くは両親など善良な人であるのに、海底人であるから見殺しにして平気なのだ。これほど大量虐殺をしたヒーローはちょっと例がないだろう。（クライシス五十億の民を全滅させたヒーローは別にして）

一方、地上では海底国の侵略部隊が東京を襲っていた。日本海溝から（地上の）東京まで泳いで戻った呑龍は、（地上の）東京の上空が海底人のドームで覆われていることを発見する。海底人と地上人では吸っている空気が違い、東京を海底国と同じ空気にするためのドームである。互いに異なる空気では数日しかもたないのだ。このドームを破壊すればすでに帰るべき国を失っている海底人の侵略軍は全滅するだろう。呑龍は、たったひとりで改造人間の侵略部隊を倒し、ドームの維持装置を破壊、東京を救うのである。

駆け足で紹介してきたが、黒豹よりすごいという意味を理解していただけだろうか。

なお、この作品は「超時空サスペンス」だそうである。

いくら科学が進もうが、人々の学歴が高くなるうが、古臭い因習が減び去って行こうが、世に、トンデモない珍説、奇説をいい出す人の種が尽きることはない。そして、そういった珍説は、どの時代でも一定の支持を受けていく。

大体、まともな学説は、いかにも当たり前っぽくて、無味乾燥な感じがする。そのくせ正しく理解するには、多大な努力が必要とされる。学者のみなさんは、トンデモ学説がはびこることに渋い顔をするが、自らの日常生活や飯の種になんの関係もなく、かつ面白くもないことに、多大の時間と労力を割いて勉強せよと言う方が、どだい無理な話なのかも知れない。

アカデミズム学説が人間の理性に訴えようとするのに対して、「トンデモ学説」は、人の情と直感に訴える。それに、冷たそうに見える「アカデミズム学説」と比べ、「トンデモ学説」には、一見夢がありそうにも見える。「アカデミズム学説」を敬遠して、分かりやすく、優しそうに「トンデモ学説」に、なんとなく引かれていってしまうというのは、人間の持つ弱み、そのものとも言えるのではないだろうか。

「と学会」は、そんな「トンデモ学説」の情に流されることなく、そのトンデモなさぶりを皆んなで称え、楽しもうという「学会」と理解している。

だが、トンデモなさぶりをいわばジョークの一種として楽しめる、と言うのは、まだかなり余裕がある状態といえるかもしれない。「トンデモ学説」が、マイナー状態を抜け出して来てメジャーへとの上がってくると、普通の人からみると、どちらの学説がトンデモなのか分からない、とようなことも起こり得てくる。

世の中に間違った信念を振りまくトンデモ学説をジョークとして容認することなく、それらからの社会防衛を行わねばならないと志した人々が、1976年に、米国で一つの組織を結成した。それがサイコップ (CSICOP) だ。

正式名称は、かなり長たらしくて、『The Committee for the Scientific Investigation of Claims of the Paranormal』。決まった日本語訳はないが、『超常現象主張の科学的調査委員会』とでもいえばいいだろう。日本ではまだ余り知られていないが、参加者の中にノーベル賞学者や一流ジャーナリストなどが多いことも手伝ってか、米国内では、かなりの評価を得ている団体といいいい。

具体的に参加者を上げると、日本でもよく知られたところでは、最近亡くなってしまった、SF作家のアイザック・アシモフ博士、科学番組『コスモス』や『核の冬』で知られる、コーネル大学天体物理学教授のカール・セーガン博士、科学雑誌『サイエンティフィック・アメリカン (日経サイエンス)』の数学パズルのコーナーや、最近改訂版が出版された『自然界の右と左』などの著書で知られるマーチン・ガードナー氏などがいる。

また、実際にノーベル賞をもらった学者としては、実験行動心理学定番の道具「スキナーボックス」の父、故B・F・スキナー博士や、素粒子のクオークモデルの提唱者マレー・ゲルマン博士、DNAの2重螺旋モデルで有名なフランシス・クリック博士などがいる。

これだけの「一流有名人」を取り揃えているが、サイコップは、超常現象について、日本の科学者が必ずといっていいほど取って見せる戦略、つまり、論争相手が主張する超常現象を一切調査もせず、「科学的にあるわけがない」と権威を笠にきて否定してみせるという、一般に何のアピール力も持たないマヌケな作戦は取らない。

本当に科学的に間違っているならば、科学的に間違っていると言うことが、科学的に示せるはずだ。科学信奉者であるサイコップの参加者は、実際、超常現象の現地調査や追試を行い、その上で、証拠を示しながら超常現象を否定する。

このやり方が、かなり徹底しているため、昔は、「科学者が超常現象を無視し、まじめに取り合ってくれないことが、超常現象研究の進歩を阻害しているのだ」と主張していた『超常現象信者』の皆様が、「こんなことなら、相手にしてくれない方が良かった」と頭を抱えた、という小話が生まれている。

そのためか、サイコップは、超常現象を信じる人々からは『Psy-COP』（サイコップ、つまり超能力取締警官）とあだ名され、恐れられる存在となっている。

サイコップの会長は、会発足以来、ニューヨーク州立大学バッファロー校のポール・カーツ教授（哲学）が務めている。最近、日本で言えば日本学術会議にでも当たる「AAS（米国科学振興協会）」のフェローに選ばれたということなので、学者としても多分一流なのだろう。

また、カーツ教授は、かなり多彩な才能の持ち主のようで、サイコップばかりでなく、プロメテウス出版という出版社の社長もしている。

この出版社は、多分世界で唯一と思うが「反・超常現象書籍」を専門とした出版社だ。そんな本は、余り売れなそうな気がするのだが、いままで出した約700点の書籍のうち95%を常備している、というところをみると、結構儲かっているのかも知れない。

サイコップは、その超常現象否定路線のためか、CIAが陰で操って作った組織だ、などと言う人がいる。日本でも、本気でそう信じている人もいるようだ。だが、そういった小耳に挟んだ噂を、はっきりした根拠もなく信じ込んでしまうという態度こそが、サイコップが最も問題としていることといえる。

大体、反・超常現象団体を組織することが、CIAにとってどういうメリットがあるのか、私には理解できない。ただ、私の知っている限りでは、CIAとサイコップの結びつきが、米国の法廷で一回だけ問題にされたことがある。

その疑似科学性を、サイコップにこっぴどく叩かれた、某能力開発セミナーカルトが、怒りの余り、サイコップを落としめようと、CIAとサイコップが関係あるかのように記したCIAメモを偽造して、反CIA団体にばらまこうとした、という事件があったのだ。逆にいえば、そういった偽造文書を作らねばならないほど、CIAとサイコップの陰謀などという話は、根拠が薄弱と言うことだ。

サイコップ本体の運営は、CIAから流れてくる幻の資金の変わりに、寄付金とその機関誌『スケプチカル・インクワイヤー(Skeptical Inquirer)』の売上で賄われている。この『スケプチカル・インクワイヤー』は、厚さ100ページほどの季刊雑誌で、発行部数は、約4万部。

書店売りはなく、みな郵送の直販形式をとっている。この4万という数は、へたな商用雑誌並と言って良い。記事内容は「反・超常現象」のオンパレードのみ、という非常に趣味的な雑誌なのだが、書店売り無しでこれだけの部数がはけてしまうということは、ちょっとすごいことだ。

ちなみに日本からこの雑誌を取ると、郵送料込みで1年分が31ドル、3年分で77ドルかかる。ビザやマスターで支払ができるので、「超常現象の嘘」を見破ることを趣味にしている人にとっては、非常なお買得品として強くお勧めできる雑誌だ。

世界63カ国に読者がいるらしいが、残念なことに、日本国内の日本人で、この『スケプチカル・インクワイヤー』を取っている人は一桁、多くても10人台ではないかと思う。ちなみにサイコップは、会員制を取っていないため、一般人は、雑誌購読者としてサイコップの活動に参加する形になる。

このサイコップの成功がきっかけとなって、世にはびこる超常現象の主張に、堪忍袋の尾が切れそうになっていた血の気の多い科学者らが、世界各地で続々と同様な組織の旗揚げを行った。今では、世界20か国以上に、70以上の類似団体が生まれている。サイコップは支部制を取っていないため、これらの会はお互いに独立した平等の関係で、緩い連帯関係を保っている。

アジアでは、この手の組織の結成が遅れていたが、インドに続いて日本でも、最近、『Japan Skeptics』（「超常現象」を批判的、科学的に究明する会）が結成された。

92年4月に総会を開いた際には、小さなニュースにもなった。そして、現在、中国でも同様な会の結成が準備されていると聞く。

『Japan Skeptics』の会員は現在、約240名。会長は、いわゆる宇宙人探しのSETI計画で有名な寿岳潤・東海大学教授（天文学）。副会長は、ミステリーサークルや、火の玉の研究で有名な大槻義彦・早稲田大学教授（物理学）が務めている。

私も、JAPAN SKEPTICSの運営委員の一人ではあるが、個人的な感想をいえば、JAPAN SKEPTICSの活動は活発とは言えない。総会を除けば、92年末までに、会からの回覧板として厚紙一枚大のニューズレターが6号出されて、11月に約80ページの機関誌が発行されたことが、JAPAN SKEPTICSの活動のすべてと言って良いだろう。

これで入会費1万円、年会費八千円は高いといわれると、私に返す言葉はない。もし、この値段を高いとお思いで、かつ大学入試レベルの英語ならどうにかなるという方には、米国のサイコップから、直接『スケプチカル・インクワイヤラー』を定期購読されることをお勧めする。

申し込みの住所は、

The skeptical Inquirer
BOX 703 BUFFALO NY 14226-9973
U. S. A

また、サイコップやその活動については、91年5月号の『科学朝日』が特集を組んでいるので、そちらも図書館などで参照していただければありがたい。

<h1>小牧久時博士</h1>	欧文選集9巻 和文選集2巻	出版部 〒520-01 滋賀県大津市坂本2丁目6 (振替 京都2-34854)
「生体内常温核融合」でノーベル賞正式候補の著者が世界に問う「地球環境」と「人間革命」の書。(日・英・佛・伊・独・西・露)		
■ニューヨーク・タイムズにも頁大で著者が発表の「絶対平和への四段階」構想(軍力・肉食・動物実験・殺虫剤の科学的段階的廃止)		
■全宇宙(無限の空間・時間・次元)の全存在を苦痛から完全救済する「天道の得道」の秘儀とは? 死後「極楽理天」に入る唯一の道		
■欧文総集編(英・佛・伊・独・西・露)3000円 ■和文総集編1000円(各送料300円)出版案内無料呈上		
		(株)生物農業研究所

菜食主義者の絶対平和

山本弘

我が家では京都新聞を購読しているのだが、ある朝、その一面に載った広告を見て、眠気がぶっとんでしまった。(図参照)(順)

生体内常温核融合!? ただでさえ常温核融合というのは怪しげで、否定する物理学者も多いというのに、さらに「生体内」とは……?

僕はすぐにこの論文集を取り寄せた。

著者略歴によれば、小牧氏というのは次のような人物である。

1926年京都に生まれた。

1959年、京都大学大学院博士過程卒業、農学博士、国立奈良女子大学講師、武庫川女子大学教授を経て、現在、フランス国際大学名誉教授。1975年、ノーベル医学・生理学賞の正式候補者としてノミネートされた。

米国世界大学院(修士・博士過程)主任教授・兼・大学長

『小牧久時欧文選集』他、著書・訳書多数。

うーむ、これはなかなかすごい人らしい。(もっとも、『超絶図書館』を読まれた方ならお分かりのように、博士号だの大学教授だのという肩書きは、ぜんぜん当てにならないのだが)

で、かんじんの「生体内常温核融合」だが、読んでみて分かったのは、これはフランスの生物学者ルイ・ケルブランの唱えた「生体内元素転換」のことであったのだ。

疑似科学に興味がおありの方なら、ケルブランの名を目にしたことがあるはずである。彼はカルシウムの欠乏した餌でニワトリを飼育し、それでも生まれてくる卵にカルシウムが含まれていることから、ニワトリの体内では、 ${}^39\text{K} + {}^1\text{H} \rightarrow {}^40\text{Ca}$ という反応が生じているのだと主張した。その他にも、マグネシウム、カリウム、鉄、マンガンなどの元素が、軽い元素の融合によって生物の体内で生じているという。

ケルブランがこの説を唱えたのは三〇年も前のことだが、今でもまだ、肯定も否定もされていない。というのも、ケルブランに反対する科学者たちは、あまりにバカバカしくて、誰も彼の実験を検証しようとしなかったからである。

小牧博士はケルブランと親しく、一時は共同研究者であった(ノーベル賞にノミネートされたのもこの頃らしい)。この論文集の中でも、カルシウムやマグネシウムを欠乏させた培養液を用いた微生物培養実験を行なって、ケルブラン説を検証しようとしている。その結果はやや肯定的ではあるものの、「筆者の実験では完全に立証されたとはいえない」と正直に記している。

ケルブラン説の最大の弱点は、元素転換の原理が説明できないことである。従来の物理学では、核融合には莫大なエネルギーが必要であるとされており、生体内の化学反応ぐらいでは、元素転換を起こすことは不可能である。また、ニワトリの体内で核融合によって数グラムのカルシウムが生成したなら、その際に発生する熱と中性子は、ケルブランの研究所を完全に焼き払っていたはずである。

これについてケルブランは、従来の物理法則は実験室の中で計測されたものであり、生体内では異なる物理法則が作用しているのだと主張していた。光の速度も一定ではなく、したがってアインシュタインの公式 $E = mc^2$ は生体内では成り立たないというのだ。(物理法則がそう簡単に変わってもらっちゃ困るんだが)

小牧博士もその点が気になっていたらしいが、そこにフライシュマンとポンスの常温核融合発見のニュースが飛びこんできて、これぞ生体内元素転換の原理、と飛びついたらしい。自分のことを「常温、低電位差での元素転換の、いはば“第一発見者”」と称している。

もっとも、この論文集を読む限りでは、小牧博士が常温核融合の基本原則を理解してい

るかどうか疑わしい。(何のためにパラジウムの電極を使ったと思ってるんだろう?)

むしろ僕が驚いたのは、表題にもなっている「絶対平和への四段階」の方である。これはこの論文集の中に繰り返し登場する。

小牧博士はキリスト教神学と仏教思想に大きな影響を受けており、熱心な平和活動を行なっている。博士の唱える「絶対平和への四段階」とは、次のようなものである。

「目標Ⅰ：人間と人間の間の平和（世界各国の軍備全廃＝世界連邦政府の樹立）」

これはまあいい。

「目標Ⅱ：人間と動物の間の平和（肉食の全廃、動物実験の全廃、殺虫剤の全廃）」

これはちょっと極端な気がするし、特に「肉食の全廃」というのは（肉の好きな僕としては）承服しかねるが、まあ主張としては理解できないものではない。

問題はその次である。

「目標Ⅲ：動物と動物の間の平和（動物相互の苦しめ合い、殺し合いを無くしつつ、しかも、その個体数を調和ある状態に保つこと）」

何と小牧博士は、昆虫が昆虫を殺したり、大きな魚が小さな魚を食べたり、ライオンや虎が草食動物を殺したりするのも、やめさせようと考えているのだ！ そうしたむごい行為は「神さまの御心ではない」と博士は主張する。動物同士が殺し合わずに平和に暮せるのが理想だと言うのだ。（『ジャングル大帝』みたいだなー）

エコロジーどころか、究極の自然破壊のような気がするが、その点、博士はあまり深く考えていないようである。殺虫剤による自然破壊は糾弾されているのだが、肉食動物がいなくなったら生態系のバランスが狂うということを、あまり重視していないようなのだ。

どうやって動物たちに肉食をやめさせるかは、明確に説明されてはいないが「生物科学とハイ・テクノロジーの進歩をとおして実行に移さねばなりません」などと書かれている。想像するに、地球上のすべての肉食動物（魚や昆虫も含む）を動物園に閉じこめて、人工蛋白で飼育するということなのだろう。（その方がよっぽど「神さまの御心」に反してる気がするがなー）

ちなみに、先の生体内元素転換の実験で、微生物を実験に用いているのに注目してほしい。つまり小牧博士の倫理観では、昆虫を殺したり、動物を実験に使うのは良くないが、作物を刈り取ったり、微生物を実験に使うのはかまわないらしいのだ。このへんの基準は、僕にはよく分からない。（そう言えば「植物にもテレパシーがある」って説があったっけ。だとしたら、稲の刈り取りなんて、大量虐殺行為だよな）

他にも、「どこからどこまでを微生物と言うのか」とか、「体内の寄生虫も殺してはいけないのか」とか、疑問はいろいろあるのだが……。

さらに次がすごい。

「目標Ⅳ：全宇宙の全存在の平和（この宇宙およびあらゆる多宇宙のあらゆる存在の激痛・激苦の永久根絶の最も迅速・円滑なる成就実現）」

これは何ともスケールがでかい。この地球、この宇宙だけではなく、すべての多宇宙（パラレル・ワールド）のすべての存在を苦しみから救ってしまおうというのだ！

もっとも、小牧博士によれば、これはそれほど難しくないそうである。というのも、博士の考えでは、あらゆる宇宙のあらゆる天体の中で、殺し合いが行なわれているのは地球だけであり、その原罪のために、全宇宙の全存在が苦しんでいる。したがって地球上で目標Ⅰ～Ⅲが達成されれば、全宇宙が苦しみから救われ、自動的にⅣも達成される……という論法なのだ。

この説の根拠はもちろん聖書であるが、他にも小牧博士は、関英男氏の「サイ情報系仮説」を取り上げて、救済は光より速く全宇宙に広まるのであり、次のビッグバンによって誕生する新たな宇宙にもその効果は波及する、などと真剣に論じている。

小牧博士は決して孤立した変人ではない。その活動範囲は広く、「小牧久時平和財団」を設立、多くの平和団体や宗教団体とリンクして、あちこちで講演会やシンポジウムを行っている。影響力は世界的なものらしい。

たとえば一九八九年に京都で開かれた公開講座「絶対平和への四段階」では、講師として、同志社大学前学長の田畑忍氏、湯川秀樹夫人で「世界連邦世界協会」名誉会長の湯川スミ氏、文学博士で世界大学客員教授の森谷峰雄氏、医学博士で「動物実験・生命操作全廃の医師と科学者の会」会長の天野英敏氏など、そうそうたるメンバーが名を連ねている。

びっくりしたのは、講師の中に「地球みどりの連合」会長として、太田竜氏の名前もあること——そう、『超絶図書館』で取り上げた『UFO原理と宇宙文明』『ユダヤ世界帝国の日本侵攻戦略』の著者の、あの太田竜氏である！

小牧博士は太田氏と親しいらしく、太田氏の著書『たべもの学入門Ⅰ・Ⅱ』を「前人未踏の哲学的名著である。眞人類への入門書である」と絶賛している。ちなみに、この論文集の中では、太田氏の肩書きは「哲学者」となっている。(どひーっ)

この二人の接点は、想像するに、無双原理の桜沢如一氏(一八九三—一九六六)であろう。太田氏の主張は桜沢氏の理論の影響を受けており、桜沢氏はケルブランと親しく、ケルブランの本を翻訳したのも桜沢氏だからだ。

他にも、生物農業研究所法人化15周年の祝賀会の発起人の中には、滋賀県知事や大学教授らに混じって、関英男、橋本健、猪股修二などの名もある。まさに「類は友を呼ぶ」という感じだ。

また、この論文集の巻頭には、ノーベル化学賞および平和賞受賞者、ライナス・ポーリング博士の書簡が載っている。ただ、「生体内常温核融合」については触れられておらず、小牧博士の平和運動についてのみ賛同されているようだ。

それにしても読んでいて困惑してしまうのが、小牧博士には物理の知識がまったく欠けていることである。ビッグバン理論について触れたりしているのだが、明らかな間違いもあり、表面的にしか理解していないのが明白なのだ。

苦笑してしまったのが、ある対談で、マーチン・ガードナーの『奇妙な論理』を読んだ(!)と語るくだり。小牧博士は長いことロジャー・マクレディ・プライスの反進化論(『奇妙な論理』100ページ参照)に心酔していたのだが、一九八〇年にガードナーの本を読んで、「どうも、ちがう、ようなのですね」と気がつき、「本格的な地質学は、十分に根拠のある学問なのです」「大筋において、進化論も一概には否定できない訳ですね」

と考えるようになったという。

まあ、自分の間違いに気がついたのは偉いと言えるが、農学博士ともあろう人が、五四歳になるまでそんなことに気がつかなかったというのも、のんきな話である。

平和運動やエコロジーはいいけど、肉が食べられなくなるのは嫌だなあ……というのが、僕の正直な感想である。

【アシモフの短編SF「金の卵を生むがちょう」は、生体内元素転換をネタにしているが、ちゃんとエネルギー保存則のつじつま合わせをやっているのはさすがである。つまりケルブランの理論はSF以下なのだ。(この小説が書かれたのは一九五六年で、ケルブランより早い)

なお、ケルブランの理論については、阿久津淳『マージナルサイエンティスト』(西田書店)が参考になる】

トンデモ本発見の難しさ

山本弘

『超絶図書館』を読んでくれた人（高校生？）から「僕もトンデモ本を見つけました」という手紙が届いた。もっとも、実際にその本を読んだわけではなく、新聞の書評を見て、これはトンデモ本だと判断したらしい。

その本とは本山達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』（中公新書）。同封されていた書評によれば、著者は生物のサイズによって時間が変化すると主張しているらしい。時間の流れは生物の体重の $1/4$ 乗に比例するという。

さっそく買って読んでみた。

結論から言えば、これはまったくトンデモ本ではない。真面目な生物学の解説書である。ここでの時間とは、物理的時間ではなく生理的時間である。すなわち、成長や老化、エネルギー消費の速さのことを言っているのだ。（実は読む前から見当はついていたのだが）

生理的時間が体重の $1/4$ 乗に比例するというのも、ちゃんとしたデータがあり、その理由も数式によって説明されている。コンノケンイチのように、データも数式も無視し、自分の妄想だけを根拠に空論を振り回す人物とは、わけが違うのである。

しいてこの本にトンデモない部分を探すなら、巻末の「一生のうた」ぐらいだろうか。（テーマソングの楽譜つきの科学解説書なんて、初めて見た……）

この一件は、トンデモ本探しの困難さを教えてくれる。『超絶図書館』のあとがきで、知識や常識のない人間はトンデモ本を笑えないと書いたが、その逆に、知識や常識がないために、まともな本をトンデモ本と錯覚することも有り得るのだ。

僕自身についても、この教訓は当てはまる。僕には、歴史・文学・哲学などに関する知識がすっぱり欠けている。当然、そういう分野にも多くのトンデモ本があるはずなのだが、どれがそうなのか分からないのである。

たとえば、江川卓の『謎とき「罪と罰」』および『謎とき「カラマーゾフの兄弟」』という本は、まともな研究書なのか、それともトンデモ本なのか？ 何しろ僕は『罪と罰』も『カラマーゾフの兄弟』も読んだことないので、判断が下せないのだ。（どなたかロシア

文学に詳しい方、お教えいただけないだろうか？）

また、トンデモ本かどうかという判断には、主観も大きく関係する。ある人にとってはトンデモ本でも、別の人はそう思わない場合もある。マーチン・ガードナーも言うように、科学と疑似科学はスペクトルの両端のようなもので、明快な境界線は存在しないのだ。

昔はまともな科学と思われていたものが、まったく間違いだったという例は多いし、その逆もある。今は疑似科学扱いされているものが、将来はまともな科学の一ジャンルにならないとは言いきれない。

僕は異星人がすでに地球に来ている可能性はゼロではないと思うし、超能力ももしかしたらあるかもしれないと思っている。未知の現象について研究するのは悪いことではない。UFOや超能力を扱っているというだけで、トンデモ本扱いすることは、絶対にあってはならない。

しかし、赤と紫が違う色であるように、科学と疑似科学は厳然と異なる。我々がトンデモ本として取り上げるのは、紫の端に位置するもの、すなわちトンデモないことが客観的に明白なものであり、中間の緑や黄色のものについては、慎重に対処する必要がある。

トンデモ本探しは決して傲慢になってはならない。

この欄では、学会員の著作を商業出版／同人誌の区別なく紹介していきます。今回は事務局で把握しているもののうち、と学会員として必読のものに限って紹介します。

①藤倉珊『日本SFごでん誤伝』『続・日本SFごでん誤伝』自費出版

こういうページで自分の自費出版物をまっさきに紹介してしまうのは、どこかのトンデモ本みたいだが、編集者の特権として好意的に認めてほしい。トンデモ本の概念を知るための基本図書であり、また『日本SFこてん古典』のパロディでもあります。

この本を横田順彌さんに送ったところ、驚くほど高い評価を受け、最近、本の雑誌社から出た『探書記』中に「本家の著者もお薦め」とまで書かれて紹介されているほどです。

なお、この本はと学会の出版物ではなく、SFファングループであるTDSFから平成元年に出したもので、お問い合わせ等は著者に直接お願いします。(と学会事務局と住所は同じですが。)

(蛇足)この本の頒価を1600円と設定したのは『日本SFこてん古典』のハードカバー版の価格が当時1600円だったからなのだが、あまり気づかれなかったようだ。

②山本弘『超絶図書館』自費出版

と学会の会長にして、SF作家、ゲームデザイナーである山本弘さんの同人誌。ただ本を入手するだけではなく、清家新一の講演会で大議論をしたり、ラエルの説明会に行き行って討論したりするようなエネルギーが素晴らしい。この本をコンノケンイチに送っているとのことですが残念ながら今のところ対応がないようです。(コンノケンイチの著書の欠点を鋭く指摘している。)

今後の、と学会の進み方を示す重要な書。なお入手に当たっては、山本弘さんに直接お願いします。連絡先は

京都市山科区御陵大津畑町4-2コーポラス大津畑町302

です。なおハードSF研の会誌で石原藤夫さんが絶賛していたことを付記しておきます。

③志水一夫『UFOの嘘』『大予言の嘘』(データハウス)

商業出版物です。志水さんの名は昔から知っていましたが、失礼ながら実際に会うまでは、なんか難しい面倒な資料を大量に持ち出してくる超常現象ライターというふうなイメージしかありませんでした。ここで改めて書いておきますが、実際の志水さんはたいへん「おもしろい」人です。「おもしろい」とは、たとえば次項の『アニメージュ』の連載のようなことです。その一方で、凄まじいほどの博識を披露してくれます。

『UFOの嘘』では、少なくとも日本のマスコミの姿勢が途方もなくデタラメであることが暴露されていますが、怒りにまかせて書いているのではなく、冷静に事実の指摘を重ねていく手法を取っており、頭が下がります。

『大予言の嘘』は、ページ数からいうと悪質な占い(いわゆる靈感商法など)が主に扱われており、今の日本に最も必要な本ではないかと思いますが(著者には失礼ながら)あまり売れていないようです。少なくとも今も社会を毒している大予言解説書より……

(なお、最近でた加治木義博著『真説ノストラダムスの大予言ーあなたの未来予知編』によると、この本は悪魔サチュマヌスが志水一夫に書かせた書だという。)

④志水一夫『アニメでいろいろ考えた』(徳間書店:アニメージュ連載中)

『アニメージュ』で今年7月号から毎月2ページの連載。『ママは小学4年生』から進化論を考えたり、『ちびまる子ちゃん』からノストラダムスを考えたりする。ノストラダムスから『紅の豚』を引き出すあたりは、と学会員必見。

雑誌のカラーから少し異なるようで、私はこの2ページのために毎月『アニメージュ』を買うのはつらい。早く本になってほしい。

⑤唐澤兄弟『脳天気教養図鑑』 青林堂

唐澤俊一さんが、と学会会員です。内容は古本市や名画座や都市伝説など、いろいろ盛り沢山ですが、トンデモ本として注目すべきは「日本脳天気本全集内容見本」。

『口笛の吹き方』『日本エホバ古典』などは、と学界員必見。

なおトンデモ本と脳天気本は、どう違うのかは、学会の今後のテーマである？

⑥山本弘『ギャラクシー・トリッパー美葉①10万光年のエスケープ』角川スニーカー文庫

小説版超絶図書館という感想もあったほど、超科学や新興宗教のパロディが多い。もちろんSFコメディとしても読めるが、アニメファンとしても、超科学懐疑ファンとしてもまたハードSFファンとしても、別の読み方ができる本である。

⑦ジョン・スラディック『遊星からの昆虫軍X』早川文庫SF

もちろんスラディックが会員であるわけではなく訳者の柳下毅一郎さんが会員です。柳下さんは、バラードの『クラッシュ』の翻訳の他、コラムニストとして『宝島』や『TVプロス』に執筆しています。（この前は『ごでん誤伝』を紹介していただきました。感謝。）

スラデックは、今、資料がすぐに出てきませんが、昔のSFマガジンに『神々の宇宙靴—考古学は覆された』というデニケンのパロディが載ったことがあります。この本の後書きによると、スラデックはオカルト本をめった斬りにした研究書を出したが、思ったほど売れず、頭に来てペンネームでオカルト本を書いたら結構売ってしまったというエピソードがあるといひます。

さて、この本は原題がBUGSであり、もちろんプログラムのバグと昆虫を引っ掛けているものです。

⑧久保田裕『超常現象の舞台裏』 科学朝日連載中

科学朝日に93年1月号（今月号）から毎月1ページ連載。まだ一回目ではあり今後に期待。本号に久保田氏によるジャパンスケプティックスの解説がある。

⑨前野昌弘『本物のいろいろの物理学者たち』 こうしゅうえいせい3号5号

（谷甲州黙認FC会誌中に掲載）

前野昌弘さんは、と学会会員です。ニフティサーブのSFフォーラムのサブシス他、超弦理論の専門化としての著述も多数有ります。

この記事は、物理学会などに出没するあやしい（笑える）理論を発表する人達を論じたもので、他に類似のものがほとんど無い貴重な文献です。将来『奇妙な論理』の日本版に発展することを期待しています。

昨年京大における清家新一の講演会記録は奇しくも『超絶図書館』と同じ講演会取材したもの。世の中は案外狭い。

⑩前野昌弘『超科学おわらい劇場の逆襲』ニフティサーブSFフォーラム短期会議室

これは、会員の著作ではありませんが、紹介しないわけにはいきません。

パソコンネットのニフティサーブ内のSFフォーラムで92年11月に限って開催された、超科学を笑うことがテーマの会議室でした。前野さんが座長を勤めていただけではなく、山本弘さんほか、と学会が何人も発言しています。（と学会員として発言したわけではなく、あくまで個人的な発言ですが。）

91年にも、やはり11月に『超科学おわらい劇場』が開催されており、おそらく今後毎年開催されることになると思われます。

と学会と違い、対象が超科学に限定されており、また話題がしばしばずれてしましますが（悪い意味ではなく、パソコン通信の楽しさは話題が広がることにある。）必見の会議室です。

なお、と学会でもNifty上にホームパーティを設定していますので、なるべくNiftyに御入会ください。

－フロッピーディスクの発明者は本当に中松義郎か？－

ドクター中松については『続・ごでん誤伝』でも『超絶図書館』でも、さらには前野昌弘さんの超科学批判でも扱われているが、最大の問題は、彼が本当にフロッピーディスクの発明者かということにあるです。

どうも、世の中では「フロッピーを発明したような偉い人なら永久機関を発明したとしても不思議はない」と思い込む人が少なからずいるようなのです。

ドクター中松以外の人々が誰も話題にしない世界発明コンテストとか、多数のドクター中松記念日の存在も、いずれ解明したいのですが、フロッピーディスクの問題に関しては、ドクター中松の著書（特に昔のもの）をいくつか読み、あと少し調べるだけでかなりのことが判ってきたので、中間報告として発表します。

醬油チュルチュルやジャンピングシューズでは、感心する人は少ないが、フロッピーディスクの発明者と聞くと感心する人が多いのは、どうやらコンピュータの外部記憶装置の歴史を誤解している人が多いためのようです。

外部記憶装置は

テープ ⇨ フロッピーディスク ⇨ ハードディスク

の順に進歩したと思っている人が多い。

これはトンデモない間違いです。これはパソコンにおける普及の順番に過ぎません。

昔の計算機（今でいうメインフレームに相当、容量は今のパソコン程度）に使われていた磁気ディスクは、磁気媒体としては固い材質を使い、これ密閉せず、剥き出しのままで使用し、さらにオペレータが媒体を交換して使用するものでした。

剥き出しの媒体を交換したのですから剣呑な話ですが、そのころのコンピュータは専門のオペレータが専用の部屋で使用するものでしたから別に問題にならなかったし、価格も高くして当然でした。

その後、磁気ディスクは、

- ・密閉し、固定化することで大容量・高速を目指したもの
 - ・ジャケットをつけ、材料をプラスチックにすることで安くしたもの
- に2極分化し、前者がハードディスク、後者がフロッピーディスクと呼ばれるようになったのです。

つまりフロッピーの発明者と言った場合、磁気ディスクの発明者を意味しないのです。

このことを誤解し、ドクター中松は磁気ディスクそのものを発明したと思っている人がいるようですが（ドクター中松自身がそう誤解されやすい発言をしています）とんでもない間違いです。

フロッピーの発明とは、磁気媒体をジャケットに入れて取り扱いやすいようにしたという発明のようです。

さて、フロッピーディスクの発明についてドクター中松自身の本によると特許を出したのが昭和23年、東大在学中の昭和25年に装置・媒体を実際に完成昭和27年に特許がおり（ゆえに特公昭27-XXXXXXという番号になるはず）

昭和47年にIBMがフロッピーの生産を開始し、昭和52年2月に、IBMとフロッピーディスク関連の patents のライセンス契約をした。

とあります。これは恐らく嘘ではないでしょう。しかし、なにを発明したのかというと最近の著書と昔の著書では、かなり違った印象を受けます。

昔の本（ここでは1986年の『異学発想のすすめ』）を読むと、このとき発明したのは、要するに取扱が楽になるためにジャケットに入れたまま再生ができるレコードであり、コンピュータの記憶装置ではないことがわかります。

ドクター中松自身が次のように書いているのです。

私が最初考えたのは、軽くて落としても割れない、棚に入れても転がり落ちてこない、そういうふうな記録・再生装置と媒体（記録再生するレコード）で、最初はそれに音楽を入れようと思って発明したのだが、その後、コンピュータというものが出てきて、デジタル信号を入れることになったのである。

つまり音楽信号であろうとコンピュータ信号であろうと信号の記録という思想には変わりがないのである。

つまり、「ジャケットに入れたまま演奏できるレコード」を発明し、その概念がたまたまIBMが独自開発した記憶装置の概念の一部に相当した・・・という事情と思われまます。そうでなければ、発明後24年後の実用化、実用化の5年後の契約という順序にはならないでしょう。

さらに、最近の本では、ドクター中松が日本のコンピュータメーカーにフロッピーの使用を売り込んだとありますが、昔の本にはそんな記載はありません。

ドクター中松が、実際のフロッピーディスクを見るまで、昭和23年に自分が考えた新型レコードがコンピュータの記憶装置に成りうるということに気がついたかどうかすら私には疑問です。

なお、昔の本ではIBMが、中松との契約を認めなかったため、中松氏自身が防弾チョッキを着込んで米国に乗り込み、契約を認めさせた・・・というエピソードが書かれています。最近の本ではIBMのほうから副社長が特別機でやって来て、個人には弱いんだなどと言ったことになっていてまるっきり書いていることが違っており、これだけでも、中松氏の書くことは相当信用できないことがわかります。

さて次に、特許についてですが、日本では公告から15年、または出願から20年の短い方で権利は消滅します。アメリカでも成立から17年でやはり権利が消滅します。

するとドクター中松の特許は、IBMの製品化のずっと前に権利が消滅しているはず。だれも、このことを指摘しないのは、不思議です。

まあ、日本のメーカーが金を払わないのは当然と言うべきでしょう。

不思議なのはIBMが金を払ったということです。

これは、謎です。もっとも、実はそれほど謎ではなく、日米の特許制度の違いと、その訴訟問題に知識があれば、たぶんあれだな・・・と推測がつくものです。もっともこれは推測にすぎないので、ここでは、これ以上書きません。

ただ、ドクター中松の本でも、IBMが特許使用料を払ったとは書いていないことに注意してください。あくまで契約した、お金をはらった、としか書いてありません。

さて、フロッピーの問題に関して、ドクター中松の最近の著作では、発明の時期やIBMとの契約の様子などが昔の本とちがって、はっきり書かれていません。

これは、わざと読者が誤解するようにしむけるためのようと思われる。

昭和23年にフロッピーを発明したなどと書いては、さすがに怪しまれると考えたのでしよう。しかし『異学発想のすすめ』を執筆した時代は、まだ8ビットパソコンが主流で、

中松氏自身が「フロッピーディスクの発明者」の肩書がどのくらい売り物になるか、まだ十分に認識しておらず、真実に近いことを書いてしまったと思われます。

『超絶図書館』にもあるようにドクター中松は1パーセントの真実を100倍くらいに拡大して語ることに長けているようです。

さてドクター中松については、もっと怪しい点があります。彼が世界一の発明王と自称する理由は、発明件数が2360件とエジソンを大きく抜いていることです。

しかし一九八六年に書かれている『異学発想のすすめ』に中松氏の発明件数を2360件と書いてあります。一九九一年に出た『常識やぶりバンザイ!』にも2360件と書いてあります。なお一九八七年の本にも2360件とあります。さらに最近のHANAKOの1992年10月15日号の「ドクター中松の頭のよくなるダイエット大特集」という記事(この記事もトンデモないものですが・・・)でも2360件なのです。

恐ろしいことに、ドクター中松の発明件数は、少なくともこの6年間、まったく変わっていないのです。これはいったい何を意味するのでしょうか。

この一方で、世界発明グランプリの入賞回数は年々増加しているのです。

よくよく見てみれば発明の数であって、特許の数ではないのです。そして中松氏のいう発明のなかには、到底特許になりそうもない政治の発明や、経営の発明、笑いの発明なども入るのです。いつもエジソンと比較しているので錯覚しましたが、到底比較にならない定義をしているとしか考えられません。

いずれにせよ。永久機関を発明したという人の主張は、よくよく注意してみる必要があるようです。

『続・ごでん誤伝』の補遺(忍者について)

『続・ごでん誤伝』の中で藤田西湖という昭和初期の忍者のことを、現代では忘れ去られていると書いたら、志水一夫さんから「あの人は忍者の世界では有名なひとですよ」と言われてしまった。

忍者の世界自体が有名ではないと思うが、志水さんの博識には恐れ入る。

しかも、よくよく「大予言の嘘」を読み返すと藤田西湖と、その著書『どろんろんー最後の忍者ー』のことがちゃんと載っていることに気がついた。『どろんろん』は少し見せていただいたが、確かに畳針を何十本も体中に指している写真があり、日本人が偉いことはまちがいないようである。

また、最近になって『超能力現象のカラクリ』(坂本種芳、坂本圭史著:東京堂出版:平成2年)を読んだら、藤田西湖のことが載っていた。

藤田氏は飛び上り9尺(2.7m)飛び下り50尺(15m)が出来ると言っていたらしい。

この本によると

「藤田氏はおそらく自ら忍者を名乗った最後の人ではなかったかと思うが、私も昭和の初期から面識があり、幾度かその術の実演の席にも立ち会ったが、いつもきまって演ずることは、鉄の分銅数個を鎖でつるして、それで裸の胸を打つこと、自分で持参した南京錠を手であけること、ガラスのコップを噛むこと位で、言うところの高飛び術や飛び下りなどは、一度も見せてもらったことがなかった」

と、書かれている。最後の忍者といえば「世界忍者戦ジライヤ」に出演していた人はまだ現役のようだがなんなのだろうか。

この世界もまだまだ奥が深い。

お く づ け

と学会連絡誌創刊号
1992年12月29日コピー・製本
1992年12月30日発行

編集 と学会事務局(事務局代表 福島暢洋)
発行 と学会 (会長 山本弘)
連絡先 〒215 川崎市麻生区上麻生2-33-12 福島方
と学会事務局